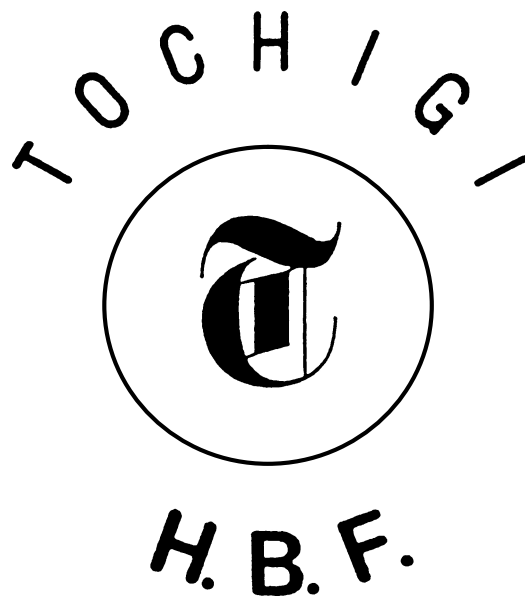


# 栃木県 高校（中等）野球の歩み

— 栃木県高校野球小史 —



栃木県高等学校野球連盟

（「栃木県高等学校野球八〇年史」より転載）

## はじめに

ベース・ボール — 四角い幌<sup>キャンバス</sup>布に包まれた三つのキャンバスバッグ（ベース）に、五角形の白色ゴム製のホームベースを備えたゲームが、いつ、誰によって生み出されたのか。投げ手が、牛や馬の皮で包まれた丸い5オンス（約141.7g）か5オンス1/4（約148.8g）のタマを投げ、木のスリコギのような棒で、根元に滑りどめの突起<sup>とつき</sup>が付いたバットというもので打ち返すスポーツは、どうやって生まれたのか。

野球のルールは今から約150年以上も前の1845年（弘化2）9月23日、アメリカのニューヨーク市ニックポッカー<sup>くらぶ</sup>倶楽部によって作られた。日本には、今から約120年前の、明治10年代に伝わってきたようだ。

俳句・短歌で有名な正岡子規は、愛媛県松山市の出身だが、松山中時代に野球と出会い、自分でもプレーした。

打ち上ぐるボールは高く雲<sup>い</sup>に入りてまた落ち来たる人の手の中

この歌は、正岡子規<sup>しき</sup>が野球のフライ<sup>と</sup>を捕るところを写實的に詠んだものだ。また彼は、野球用語の日本語訳もしている。その中の訳語のうち、彼の本名「昇<sup>のぼる</sup>」をもじって、「野球<sup>のボール</sup>」と「ベースボール」を訳した、という話さえある。「野球」という日本人<sup>とりこ</sup>を虜にした舶来スポーツの日本語訳をしたのがだれかというのは興味ある話題である。

とにかく、野球が日本に入ってきて、これ以上の広まり方はないように日本人を夢中にさせた。なかでも、学校の代表スポーツとして、日本独自の発展をとげたのは奇跡的なできごとだった。

野球は、囲いのある競技場で、監督が指揮<sup>しき</sup>する九人のプレーヤーから成る二つのチームの間で、一人ないし数人の審判員のもとに、本規則に従って行なわれる競技である。

（「公認野球規則」一・〇一）

技<sup>わざ</sup>の巧拙<sup>こうせつ</sup>にあらず、勝敗<sup>わこうど</sup>にあらず。若人が己の持つ熱と力の総てを傾<sup>すべ</sup>注し<sup>けいちゆう</sup>尽くして、汚れなき無心の白球を、清純<sup>むが</sup>な無我<sup>きょうち</sup>の境地<sup>いっしんふらん</sup>で、一心不乱に追いつけることこそ高校野球の生命である。

（佐伯達夫「栃木県高校野球六十年史 巻頭の言葉」）

この二つの言葉の中に、日本の野球が、特に日本の学生野球がたどった歴史が刻まれている。

「囲いのある競技場」が「教育の場」となり、「競技」が「生命」に、いつのまにか、意味づけられていった。「野球」は単なるスポーツではなく、日本人の教育のそのもののように考えられたのだ。

公認野球規則の2番目（一・〇二）には、「各チームは、相手より多くの得点を記録して、勝つことを目的とする」と書いてある。これは、はっきりとスポーツゲームとしての野球の目的が、書かれてある。野球は「相手より多くの得点を記録して、勝つ」ためにするゲームなのだ。

スポーツがもともと持っている魅力とは、野球にかぎらず、ゲームとしてのおもしろさである。そのもともとのおもしろさが、そのスポーツを多くの人に受け入れさせ、広めさせる力となるのだろう。しかし、今の学校の野球には、いろいろなものがよけいに結びつきすぎた。結びつくのはいいが、それがゲームとしての本当の楽しみを失わせてしまうほどであってはこまる。ここまで発展した栃木県の高校野球にも、本来の野球のおもしろさ、人々を熱狂させたものが隠<sup>かく</sup>されているはずだ。それを、今、再発見することがこれからの高校野球を考えるときに、いちばんはじめにすることではないだろうか。

この小史は、そのために書かれたものである。

そして、栃木県高校（中等）野球の歩みは、それほど豊かで、ダイナミックなものであった。

## 宇都宮中 日本最初の対抗試合

今から約100年前の明治29年、宇都宮中学に「野球部」が誕生した。その年の10月17日に、茨城県の水戸中学と宇都宮市旧城内広場（本丸）で試合をした。中等学校の学校対抗試合として、日本で最も古い試

合の記録である。試合結果は、31対15のスコアで水戸中の大勝であった。その後も、明治30年、31年、中断をはさんで明治39年と対抗試合が、同じ10月17日に行われている。

10月17日——この日は、日本初めての対抗試合が行われた日として、栃木県高校野球だけでなく、日本の高校野球にとっても、まさに記念すべき日なのである。

この明治時代の野球は、今とはだいぶ違っていただろう。

まず、「ナインボール」という時代があった。「ナインボール」とは、今の「フォアボール」と同じである。もともと野球は、打者が要求したところに投げるとストライクで、そこからはずれた球がボールである。このころは、ボールが9球で打者が1塁に歩くというきまりだった。明治19年に一高にベースボール会が作られるとルールもだんだんに統一され、ナインボールから「ファイブボール」へと変わった。ボールが5球で1塁に歩けるのだ。

ストライクは3球で、今と同じだった。また、このころの野球では「バウンドキャッチ」というのが行われていた。キャッチャーが、打者のはるか後ろにいて、投手の投球をワンバウンドさせた後で受けた。だが、3球目を捕球されなければ、1塁に走れたのは今と同じだったから、2ストライクをとるとキャッチャーがマスクをつけて打者の後ろに来て受けるのである。フライも捕球されるとアウトだが、ワンバウンドでの捕球もアウトとされた時代もあったという。今の、少年野球のフライが苦手な子どもたちには、うらやましいルールであろう。

ファウル7つで打者はアウトというきまりもあった。このきまりはかなり後まで子供の遊びには残っていた。試合は21点先取した方が勝ちというルールもあったようだが、実際にはこのルールはあまり適用されなかったらしい。

ともかく統一したルールで野球が行われるまでには、かなりの混乱があったものと思われる。現在でも、野球ルールの改訂が毎年のように行われているのを考えると、実にルールを決めるのが難しいスポーツが野球である。

また当時、審判員は一人で、投手の後ろに立ち判定した。ただし、審判員の判定をめぐるトラブルはたくさんあっただろう。現在のプロ野球などを見ていると、特にそう思う。判定の難しさも、野球というスポーツのもう一つの大きな特徴といってよいだろう。

したがって、明治29年の宇都宮中—水戸中の試合は、今の高校野球の試合とは、かなり違うものであったと考えた方がいい。

## 真岡中 予選初参加

大正7年というから、1918年。今から80年前の8月1日。真岡中が、第4回全国中等学校野球大会予選の関東大会に、初めて栃木県から参加した。当時はまだ県大会は行われていなかった。関東大会の場所は、茨城県（水戸商）であった。真岡中は下妻中と1回戦を戦い、7対5で惜しくも敗れた。

この大会の優勝は、茨城県の竜ヶ崎中だったが、残念なことに全国大会は中止された。原因は、富山県から全国に広まった「米騒動」であった。「米騒動」とは、米屋がシベリア出兵での値上がりのをあてこんで米を買い占めたり、売りおしみをしたりして、米の値段がいつべんに50倍以上にもなり、8月3日に富山県の主婦らが米の安売りなどを求めて、米屋を襲撃した。人々の暮らしは苦しく、これが発端となって全国的な暴動となった。全国大会の主催者朝日新聞社では、8月14日「大会延期」の社告を出し、事実上の中止が決まった。

初参加の年に大会が中止になるというのは、何かいやな幕開けである。

しかし、この年を含めて、全国大会が中止になったのが5年間ある。残りの4年間は第二次世界大戦だ。高校野球大会が開かれるというのは、それだけでありがたいことなのだ。この前、阪神大震災でも選抜大会を開くかどうかいろいろ悩んだが、高校野球大会は平和のあかしなのだ。二度とこれから、大会中止という日本にはしたくない。

## 宇都宮中 予選初勝利

初参加から2年後の大正9年8月2日。宇都宮中が関東大会（茨城・竜ヶ崎中）2回戦で、6対2で千葉中を破った（1回戦は不戦勝）。これが記念すべき、栃木県の公式試合初勝利である。宇都宮中は、次の準決勝では竜ヶ崎中に10-0で敗れたが、この第6回大会で栃木県にようやく片目が開いたのである。

なお、関東大会は第4回大会から第8回大会まで、5年連続で茨城・竜ヶ崎中が優勝し、全国大会に出場している。（第4回全国大会は中止）

さらにそれから2年後の大正11年8月2日。大田原中が、関東大会初出場で決勝戦に駒を進め、常勝・竜ヶ崎中と死闘をくりひろげていた。

2回に大田原中が3点を先制すると、その裏竜ヶ崎中は4点を奪い4-3と逆転。6回に大田原中が1点取り4-4の同点に追いつくと、その裏竜ヶ崎中は決定的と思える4点を奪って8-4と突き放す。あきらめない大田原中ナインは、8回に4点を奪って、とうとう8-8の同点としたのであった。

前日の準決勝でも銚子商に延長10回、4番・中津川のライト前ヒットで8-7とサヨナラ勝ちした粘りがある。大田原中の全国大会初出場の期待が高まった。しかし、二日連続で、19インニグス目の投球となる大田原中・渡辺投手も疲労の色濃く、9回裏、竜ヶ崎中に1点を奪われて、くやしいサヨナラ負けとなった。

しかし「県北の雄」大田原は、この後も、不死鳥のように甲子園に挑み続ける。

初参加当時の、栃木県の関東大会参加校と成績は、次の通りである。

第4回（大正7）	真岡中	5-7	下妻中	（1回戦）	
第5回（大正8）	宇都宮中	6-10	千葉師範	（1回戦）	
第6回（大正9）	真岡中	1-15	竜ヶ崎中	（1回戦）	* 1回戦は不戦勝
	宇都宮中	6-2	千葉中	（2回戦）	
	宇都宮中	0-10	竜ヶ崎中	（準決勝）	
第7回（大正10）	真岡中	6-7	千葉中	（1回戦）	* 1回戦は不戦勝
	宇都宮中	2-3	千葉中	（2回戦）	
	足利工	5-3	群馬・太田中	（2回戦）	
	宇都宮農	4-12	土浦中	（2回戦）	
	足利工	8-5	千葉中	（3回戦）	
第8回（大正11）	足利工	0-10	竜ヶ崎中	（準決勝）	* 1回戦は不戦勝 * 1回戦は不戦勝 * 1回戦は不戦勝
	宇都宮中	2-6	千葉中	（1回戦）	
	宇都宮農	10-6	熊谷中	（1回戦）	
	足利工	3-2	千葉師範	（2回戦）	
	真岡中	11-3	宇都宮農	（2回戦）	
	大田原中	17-5	茨城・太田中	（2回戦）	
	足利工	2-12	千葉中	（3回戦）	
	大田原中	9-5	真岡中	（3回戦）	
大田原中	8-7	銚子商	（準決勝）		
大田原中	8-9	竜ヶ崎中	（決勝）		

## 宇都宮商 全国大会初出場

大田原中が決勝でサヨナラ負けした次の年、大正12年8月2日、群馬県・前橋中で第9回中等学校野球関東大会の決勝戦が行われていた。

試合は千葉中が先攻で、宇都宮商・<sup>たて</sup>館投手は四球や内野のエラーなどで小刻みに点を奪われ、4-1とリードされていた。しかし7回裏、宇都宮商は疲れの見え始めた千葉・高山投手を攻めた。怒涛の攻撃でこの回に一举6点を奪い、7-4と試合をひっくり返してしまった。その後、<sup>どとう</sup>館投手の力投で千葉中の反撃を9回の1点だけに抑さえ、結局7対5で、栃木県野球史上初の全国大会出場という快挙を、初参加で、しかも監督もいないチームが達成したのであった。

全国大会は<sup>なるお</sup>鳴尾球場で行われた。鳴尾球場はこの年が最後の年となり、次の大正13年からは、甲子園球場が完成し、熱戦の舞台となるのである。

宇都宮商は、全国大会でこの年優勝した<sup>こうよう</sup>甲陽中と1回戦を戦い、前半は2-0とリードしたけれども、6失策と守備が乱れ、結局8-2で逆転負けという惜しい結果であった。

しかし、宇都宮商の関東大会優勝、全国大会初出場の活躍で、この年、栃木県民の野球熱が一举に盛り上がりを見せたのである。

初の全国大会に出場した宇都宮商の、関東大会決勝戦のメンバーを次に挙げておこう。

1	一塁	三浦
2	三塁	楡井
3	捕手	荒井
4	投手	館
5	中堅	森田
6	二塁	長島
7	遊撃	石川
8	右翼	神原
9	左翼	五十嵐

戦後、昭和 37 年第 15 回秋季関東大会で宇都宮商は準優勝を挙げた。決勝は上尾とだったが、5-1 で敗れた。翌昭和 38 年、第 35 回選抜大会で宇都宮商は 2 度目の甲子園に出場した。いや、初出場が鳴尾球場だったから、初の甲子園を宇都宮商ナインは踏んだのである。初戦東邦と対戦し 2-11 で敗れたが、全国大会で鳴尾球場と甲子園球場を経験した全国でも数少ないチームの一つとなった。

それから 16 年、昭和 54 年第 51 回選抜大会にアベック出場として騒がれた選抜 2 校出場の快挙があった。第 51 回選抜大会での作新学院・宇都宮商の同時出場である。

前年秋の関東大会決勝を戦った宇都宮市内の両校がそろって選抜に出場するという快挙に、宇都宮市民は大喜びだった。宇都宮商、山崎監督（元理事長）にとっても、それまで全国大会目前での敗退が多かっただけに感無量であった。宇都宮商は、その第 51 回選抜大会で久留米商を 3-0 と破り全国大会初勝利を上げた。2 回戦では PL 学園と対戦し延長 10 回 6-8 と惜しくも敗れ去った。

しかし、栃木県の全国大会初出場校という歴史は、宇都宮商にとって永遠に失われることのない栄光である。

## 宇都宮中 甲子園初勝利

宇都宮商が鳴尾球場での全国大会に初めて参加した次の年大正 13 年 8 月 1 日、宇都宮中が関東大会決勝に進出し、陣野一酒井のバッテリーと鍛えられた守備で、前橋中を延長 11 回の末、4-3 とサヨナラで破り、栃木県チームが 2 年連続の関東大会制覇と全国大会出場の快挙を成し遂げた。

宇都宮中は 9 回裏、3 番・馬場が 2-3 のカウントから鮮やかなセンター前クリーンヒットを放って勝利を呼び込んだ。馬場は、感激のあまり 1 塁ベースを踏むことを忘れ、監督に怒鳴られてようやく 1 塁に達したというほど感動的な幕切れだった。

さあ、全国大会だ。

「甲子園」——その後、野球を夢見たすべての球児にあこがれを抱かせた球場が、6 万の大観衆を収容するスタジアムが、東洋一という偉容で宇都宮中ナインを出迎えた。大正 13 年 8 月 1 日、奇妙な一致だが宇都宮中が全国出場を決めた関東大会決勝のその同じ日に、甲子園は、完工式を挙げていた。

8 月 13 日。第 10 回全国中等学校野球大会が、その甲子園で始まった。宇都宮中は 1 回戦不戦勝で 2 回戦に佐賀中と対戦。打撃戦の末 10-7 と勝利を収めた。

栃木県の、関東大会での初勝利と、全国大会での記念すべき初勝利の栄誉を、宇都宮中は永遠に手にしたのである。3 回戦は鳥取一中と対戦、4 回に大量 4 点を奪われ、終盤猛追したが一步及ばず、4-5 で 2 勝目は成らなかった。

その後 70 年経ったが、宇都宮中（宇都宮高）は全国大会ではこの 1 勝だけだ。それを思うと、今できそうなことをその時成し遂げる大切さが、歴史の教訓としてわれわれの胸を打つ。

# 宇都宮中 棄権試合

2年後の大正15年の第12回大会からは、関東大会に代わって北関東大会が、栃木・埼玉・群馬の3県で独立して開催されることとなった。

第1回の開催県は栃木県で、宇都宮中学を会場に、7月30日から予選が始まった。

栃木県の予選参加校は、宇都宮中、大田原中、下野中、宇都宮農、栃木商、鹿沼農商、栃木師範、宇都宮実、宇都宮商、足利工、佐野中、真岡中、栃木中の13校であった。

埼玉県は熊谷中、埼玉商、川越中の3校、群馬県は前橋中、桐生中、前橋商、高崎商、高崎中の5校の参加であった。

8月5日、宇都宮中―前橋中で北関東大会の決勝が行われた。

試合は、前橋中が丸橋投手（元足利学園野球部長）の好投で7回表まで5-1と優位に立っていた。

7回裏、宇都宮中は一死から四球、相手エラーのあと2番・五月女のタイムリーで2点を挙げ、5-3と2点差に迫った。なおも、相手エラーなどで一死満塁のチャンスが続く。続く5番・大谷が放った打球は三塁線のゴロ、これを三塁手がバックホーム、本封したと思っただが、炎天下のグラウンドにランナーが猛スライディングして土煙が上がる中、前橋中片桐捕手がこれを落球。

しかし、主審武満氏はアウトのコールを発した。すぐに、宇都宮中ベンチから落球の猛アピール。ところが、武満氏はこれを認めない。すると、集まった地元観衆が抗議のためグラウンドに乱入、暴力に訴えてでも判定を翻そうという暴挙に出た。バックネット裏にいた審判長・飛田穂州氏はじめ審判員、及び前橋中ナインにも危害の恐れが出たため、審判員は門前の自動車を捕まえて脱出、旅館に戻った。

前橋中の選手も、宇都宮中ナインに誘導を受け校舎内に避難した。

幸い、直接的な被害は生じなかったが、試合は続けられようがなく、宇都宮中の棄権試合ということになった。

加熱した野球ファンの暴走が大きな汚点を生んでしまった。

なお、飛田穂州氏とは早稲田大学の選手・監督として日本の野球界を育て、後には新聞記者として活躍し、野球の殿堂入りを果たした「学生野球の父」といわれる人物である。

それよりも、「一球入魂」の言葉を残した人と言った方が有名かも知れない。氏は茨城県の出身であった。

## 栃木県大会始まる

宇都宮中が甲子園を目前に、棄権試合で敗れて5年後の昭和6年、ようやく第17回大会から北関東大会の予選をかねて栃木大会が開催された。

第1回の栃木大会は宇都宮中（南・北球場）・宇都宮工の3球場で7月24日から開催された。

満州事変が始まった年で、軍国色濃くなる中での大会であった。北関東大会の出場権は2校（地元開催は4校）と定められたため15校参加した県予選参加チームの激戦が続いた。栃木大会初の決勝は、宇都宮中―烏山中で行われ、宇都宮中が打線爆発し13-6で栃木大会初の優勝校となった。

北関東大会は、群馬県で開催され、栃木2（宇都宮中、烏山中）、埼玉2、群馬4の8校で行われた。

川俣四郎監督率いる烏山中は、県大会決勝でこそ宇都宮中に敗れ去ったが、北関東大会では前橋中を13-3、豊岡実を8-7とサヨナラで下し、決勝に進出した。北関東大会決勝では、群馬・桐生中と甲子園出場をかけて対戦した。しかし、17-4と大敗を喫した。烏山町では今でも、試合前日、応援団が大挙して選手を激励に訪れ、御馳走を振る舞ったのが食あたりを招いたのだ、という話が残っている。

なお、監督の川俣四郎氏は烏山中（烏山学館）の創始者川俣英夫先生のご子息である。

栃木県の各チームが、東京6大学からOBや臨時コーチを招き、強化に務め、覇権争いが熾烈を極めてきた。

中等野球の熱気が、暗い世相を照らす大きな灯火であった。

## 常設球場完成

次の、昭和7年、第18回大会で常設球場（現在の宮の原小付近）が完成し、予選が行われることとなった。

全国の参加校も660校と増加し、この年からは全ての都道府県で予選が行われることになった。

野球熱の盛り上がりもすさまじく、犬養内閣の文部大臣・鳩山一郎は野球統制令を発し、文部省が全国大会の許認可を下すこととした。これによって各種団体による自由な全国大会開催は禁じられたわけであり、アマチュアスポーツの華としての中等野球が、中等野球の全国大会である夏の選手権大会、春の選抜大会の地位が確立したのである。

政府、文部省の統制はマイナス面もあったろうが、学校スポーツの粋をはみ出さないという高校野球精神誕生のためには実に意義深いことだった。

常設球場での最初の優勝校は、栃木商だった。

続く北関東大会も栃木県で開催され、地元のため栃木商、栃木中、下野中、栃木師範の4校が出場した。しかし、下野中が準決勝まで進んだものの甲子園出場はならなかった。

\*下野中一のちの作新学院

## 栃木中 全国大会1勝

この当時は栃木商、栃木中の黄金時代で、昭和8年は栃木市を二分しての熱戦が展開された。ライバル校が近くにありともにチーム力を高めた結果、全体のレベルアップもはかれる。

昭和8年、第19回大会は、栃木中がライバル栃木商を下して初優勝、北関東大会でも決勝で桐生中を2-0と下して、初の甲子園に出場した。

甲子園でも2回戦、大分商と対戦した栃木中は、阿部一町田のバッテリーを中心に健闘、3-2とみごと逆転勝ちをおさめ、初出場記念すべき勝利を手にした。続く3回戦では松山中と対戦、9回まで2-1とリードしていたがその裏、連続長打を含む3連打を浴び逆転サヨナラ負け、惜敗であった。

栃木中は翌年の選抜大会にも出場し、栃木県の選抜大会の輝くべき最初の出場チームとなった。

なお、この第19回大会準決勝では中京商-明石中の延長25回の熱戦が行われた。明石・中田、中京商・吉田の息詰まる投手戦で、延長なんと25回裏、中京商が二ゴロの間に1点を挙げ、1-0で勝利したのである。

中京商7安打、明石8安打と投高打低の時代であった。

## 北関東の高い壁

第20回（昭和9年）大会から戦争のため中断となる第27回（昭和16年）大会まで、栃木県チームは全国大会出場を成し遂げられなかった。

この間の栃木大会の決勝戦と北関東大会の決勝戦は、次のようであった。

#### 第20回大会～第27回大会

大会	栃木大会 決勝	北関東大会 決勝	北関東大会参加県
第20回 (S9)	宇都宮実 3-0 栃木商	桐生中 16-8 前橋中	栃木・群馬・埼玉
第21回 (S10)	鹿沼農商 3-0 宇都宮実	桐生中 8-0 前橋中	〃
第22回 (S11)	足利工 2-1 栃木商	桐生中 10-1 高崎中	栃木・群馬・茨城
第23回 (S12)	栃木商 5-1 宇都宮工	高崎商 0-2 栃木商	〃
第24回 (S13)	宇都宮実 4-3 宇都宮工	高崎商 7-3 茨城工	〃
第25回 (S14)	宇都宮実 9-0 烏山中	桐生中 11-1 桐生工	〃
第26回 (S15)	足利工 6-0 宇都宮中	高崎商 1-0 足利工	〃
第27回 (S16)	下野中 3-0 市宇都宮商	中止	

この8年間、群馬県勢の完全制覇であり、桐生中、高崎商の2強時代だった。

この傾向は 戦後復活した大会でも続き、栃木県にとって長い冬の時代であった。

しかし、このような時期にも多くのチームが「夢」を求めてチャレンジを続けていたからこそ、次の飛躍があったのだと言える。栄光の陰には、必ずそこへいたる原因がある。

#### 戦後 第28回大会～第31回大会

\* 第30回から高校野球大会

大会	栃木大会 決勝	北関東大会 決勝	北関東大会参加県
第28回 (S21)	鹿沼農商 1-0 栃木中	桐生工 5-2 桐生中	栃木・群馬・茨城
第29回 (S22)	鹿沼農商 2-0 足利商工	桐生中 5-0 鹿沼農商	〃
第30回 (S23)	大田原 5-4 宇都宮	前橋 4-1 水戸商	〃
第31回 (S24)	作新学院 2-1 足利工	水戸商 2-1 桐生工	〃

## 宇都宮工 黄金時代

長い間群馬勢に屈してきた栃木県に、一挙に華々しいニュースがもたらされた。

浜野監督率いる宇都宮工が神田一吉成のバッテリーを軸に、北関東の壁を17年ぶりに突破し、甲子園出場という朗報をもたらしただけでなく、全国大会でも準決勝に進出、また、翌年の選抜でもベスト8にはいるなど、一挙に全国の頂点をうかがうまでになったのだ。

まず、戦後の宇都宮工の戦いぶりを整理してみよう。

- 第28回 (S21) 不参加
- 第29回 (S22) 1回戦 佐野中に0-10で敗れる
- 第30回 (S23) 準々決勝 足利に0-5で敗れる
- 第31回 (S24) 2回戦 小山に延長18回7-8で敗れる

こうして、徐々に力を付けてきた宇都宮工は第32回大会(昭和25年)、一挙に華を開くのである。

この昭和25年、宇都宮工は、県大会の決勝に駒を進めた。足利を4-1、黒磯を9-0、栃木商を3-1、大田原を6-3と下し、決勝では足利工に1-2と惜敗したが北関東大会への出場権を得た。

北関東大会は、昭和25年7月30日から宇都宮常設球場で行われた。初戦、茨城に3-1と勝ち、準決勝は強豪桐生、しかし、神田投手が桐生を完封、1-0で薄氷の勝利をつかむとともに、念願の打倒群馬を達成した。

決勝は、茨城代表の水戸一と対戦した。水戸一の石井蓮造投手は、関東でも評判の好投手。後に早稲田大学の監督や全日本の監督まで務めた名選手・名監督である。しかし、宇都宮工・神田投手は水戸一を1安打、



1 四球、9 奪三振の完璧な投球で封じ、3-0 で悲願の甲子園初出場をもたらしたのである。

この試合の球審伊丹氏は「神田投手のポップする低めの決め球で水戸一打線を翻弄した」と感想を述べている。

宇都宮工の強みは、各打者が徹底してボールを打たないこと、投手がコースをつくピッチングをすること、野手が正面で腰を落としてプレーすること、といった基本のすばらしさにあった。体力に恵まれた選手が雑なプレーで勝利を逃す、また、精神面の幼稚さから大向こう受けをねらったり、本当の野球の怖さを知らないで大胆に、あるいは粗雑にプレーするチームが多い中で、当然のことをこれほど戒め、完成させていったチームは少ない。当然のことであるから、余計に難しい。浜野監督はそれをよく知っていた。

厚い北関東の壁を破った宇都宮工は、甲子園大会で3回戦神奈川商工を6-4、準々決勝は若狭を16-0の大差で破り、準決勝に進出した。

準決勝で対戦する松山東(現松山商)はこの大会の覇者。力量では宇都宮工も後れをとっていなかったが、伝統のある四国の厳しい野球を崩せず、0-5と敗れた。

初出場で全国ベスト4の成績を得た以上に、野球王国、四国のチームから学んだものの成果は大きかった。

第35回大会(昭和28年)、宇都宮工は2度目の甲子園出場を果たした。

県大会決勝は市内のライバル清水監督の宇都宮商。延長11回、関口選手の殊勲打で2-1と辛勝。北関東大会も桐生工、作新学院、そして再び宇都宮商を決勝で破り、鉄壁の守りを武器に全国大会に進んだ。

この第35回全国大会からNHKがテレビ放送を開始した。

1回戦、津を2-1、2回戦鳥取西を6-4と破り準々決勝に進出した。

準々決勝では山上・阿久津の両投手を擁した宇都宮工は、名門中京商に挑んだが、攻撃がちぐはぐで0-2と惜敗した。しかし、全国の名門校と互角に戦った自信を、しっかり持ち帰っての敗戦だった。

昭和34年の第41回大会。作新学院が初出場で全国ベスト4に輝いた翌年、強力なライバルの出現で宇都宮工もよい刺激を受けた。

この年、大井・猪瀬の黄金バッテリーで今市を3-0、矢板を1-0、茂木を4-0とすべて完封で勝ち上がる。準決勝は雨の中烏山に7-1としたところで6回降雨コールドゲーム。決勝は、宇都宮学園とだった。大井投手が2安打完封のベストピッチを見せて優勝した。

北関東大会も順調に勝ち進んだが、決勝で前橋栗本投手のクセ球に苦しんだ。延長15回の末、石沢選手がサヨナラとなる二塁打を打ち、1-0で全国大会出場を決めた。

夏、3度目、選抜を加えると5度目の甲子園だ。

昭和34年8月18日、甲子園での決勝戦を栃木県民のみならず、全国の人々が固唾をのんで見守っていた。

西条・金子投手と宇都宮工・大井投手の一步も引かない投手戦で、2-2のまま延長戦に入った。決勝戦の延長試合は、6年前の第35回に松山商一土佐で13回の記録があった。しかし、その13回を過ぎても両軍得点できない。そのまま延長は15回を迎えた。

甲子園での宇都宮工は、2回戦から登場した。2回戦広島島 陵に2-1、準々決勝高知商に1-0、準決勝は大型チーム東北と延長10回の末、2-1とサヨナラ勝ち。無失策の守備が大井投手を盛り立てた。

そして、決勝は愛媛県西条。ともに守りを中心とした粘りのチームだった。

準決勝も延長10回を投げ抜き、連投の大井は気力だけで14回を投げ抜いていた。15回表、宇都宮工内野陣に失策がかさなる。西条の猛攻を耐え続けてきた緊張が切れると、3時間35分のドラマの終焉が訪れた。15回表、宇都宮工は悪夢の6失点。死闘の末の、そして、輝く全国準優勝であった。

それから27年、準優勝チームの捕手、猪瀬監督(現上三川町長)が率いた宇都宮工は、昭和61年第68回選手権栃木大会決勝で大田原と延長11回の炎天下の死闘を1-0で勝ち抜き、再び甲子園に帰ってきた。

初戦は和歌山・桐蔭と対戦、3-2と勝利を収め、27年ぶりの校歌が甲子園に流れた。

その校歌が流れた頃、一人の男が病床上に就いていた。

そして校歌が再び甲子園に流れたのを見届けたかのように、宇都宮工監督、栃木県高野連理事長をつとめられた「栃木県高校野球の父」浜野仁氏は、翌昭和 62 年 1 月 22 日、永眠した。

栃木の高校野球を、その黄金時代を築き上げた、「練習で泣き試合で泣くな」の浜野野球は栃木県高校野球の至宝である。

平成元年、宇都宮工は 3 度目の選抜大会に駒を進めた。

3 月 27 日近大付との戦いは、両軍必死の攻防で 10-10 のまま延長 10 回を終えた。試合ははじめから降る春の冷たい雨も激しさを増し、11 回を終えたところで降雨コールドタイゲームが記録された。引き分け再試合である。

3 時間 34 分のこの戦いは宇都宮工健在を全国に見せつけた。土壇場で同点本塁打を放ち、リリーフして投げぬいた仁平の活躍が光った。翌 3 月 28 日の再試合は近大付ペースの試合となり 3-7 と初戦で敗れはしたが、古豪復活が多くの人々に印象づけられた。

平成 8 年 4 月 1 日第 68 回選抜大会、大森監督率いる宇都宮工は 2 回戦で東邦と対戦した。4 度目の選抜大会出場であった。

3-1 とリードした 6 回表、宇都宮工の主砲鈴木は東邦古場から豪快にバックスクリーンへ白球を放り込んだ。久々の本県選手の本塁打、しかも打者ならだれでもあこがれるバックスクリーンへの 1 発はまさに野州球児の溜飲が下がるものだった。

宇都宮工は初戦松山商を 7-3、東邦を 4-3 と下し準々決勝に進み、優勝した鹿児島実に 2-1 と惜敗したが、向田一竹沢の活躍で久々に全国大会の上位進出を果たした。

長く栃木県の高校野球をリードしてきた宇都宮工の活躍は、本県の中心校として揺るぎない伝統と成果に支えられ、今後もどのようなドラマをつけ足すのか楽しみである。

## 足利工 粘りで甲子園

古豪足利工の甲子園への道は遠かった。

高等学校へと学制改革された翌昭和 24 年。第 2 回の秋季大会に足利工は初優勝した。

翌昭和 25 年、夏の選手権栃木大会に足利工は優勝、しかし北関東大会では敗退した。優勝したのは宇都宮工。その宇都宮工は甲子園でベスト 4 に進出した。

それから 6 年。第 38 回（昭和 31 年）、足利工は創部 35 年で初の甲子園出場を果たした。栃木大会は 1 回戦矢板に 7-0、2 回戦小山に 3-1、準々決勝では今市と対戦し、栃木大会最多記録の延長 19 回の末、3-1 と勝ち上がった。

準決勝では石橋と対戦、延長 11 回で 2-1 とサヨナラ勝ち、決勝は作新学院に 0-8 と完敗したが、北関東大会出場を決めた。

地元開催の北関東大会で、1 回戦前橋商を 1-0 と破り、準決勝は水戸一と延長 10 回の熱戦で 2-1 とサヨナラで勝った。

予選 7 試合で 3 度の延長を勝ち抜いた驚異の粘りは、選手達に、延長なら負けない、という自信を植え付けていった。

さらに、栃木県民を驚愕させたのは、古溝監督が前年に足利工を卒業し、法政大学に進んだばかりの若き OB だったということだ。若さの途なエネルギーは、時に信じられないパワーを生む。

北関東大会決勝は、群馬・藤岡との対決となった。1-1 で迎えた延長、実に 21 回、小林の決勝打で 2-1 と勝ち越し、池田投手が 21 回を投げ抜き、悲願の甲子園に進出した。

この試合での足利工のアピールプレーは試合をあきらめない教訓として語り伝えられている。二死から決勝点を藤岡に奪われ、サヨナラ負けの場面で、進塁義務を怠った走者を見逃さず、アピールアウトで窮地を脱したのである。

しかし、全国大会では残念ながら初勝利は挙げられなかった。

さらに 7 年後の昭和 38 年、第 45 回記念大会にも足利工は川田一植木のバッテリーで 2 度目の甲子園に出

場した。

全国大会ではしかし、川田投手の故障から九州学院に 21-3 と記録的な大敗をした。

7 回表に 3-3 と同点に追いついたが、その裏川田投手の右足ケイレンが悪化し降板、投手のやりくりがつかず、1 イニング 13 失点という信じられない結果となった。

足利工の甲子園は、不思議に勝運に恵まれない。

足利工はその後、昭和 47 年の第 54 回大会、昭和 57 年第 64 回大会、昭和 59 年第 66 回大会、昭和 62 年第 69 回大会と 6 度の甲子園出場を成し遂げた。

これは宇都宮学園の 7 度につき本県第 2 位の出場回数である。

昭和 47 年はあの江川投手を下した小山を北関東決勝で破っての甲子園であり、昭和 57 年は古溝監督が復帰して、2 度目の甲子園出場であった。

また、昭和 59 年、62 年は斎藤庄作監督が熱血指導で導いた甲子園であった。

その昭和 62 年の甲子園に出場した足利工のエースが石井投手であった。

石井は、平成 10 年プロ野球日本シリーズを 38 年ぶりに制覇した横浜ベイスターズの主将を務めたことは有名だろう。そしてその日本シリーズに出場した横浜・戸叶投手も、斎藤監督の佐野商での教え子であり、パリーグの平成 10 年度の新人王に輝いた西武・小関選手は國學院栃木の出身だった。

日本シリーズというプロ野球のひのきぶたい 舞台で本県出身選手の活躍が見られるのは嬉しいことである。

しかし、華々しいプロ野球や甲子園の勝利・栄光ばかりを人々はもてはやすが、この栄光の影にある指導者の存在を見逃すべきではないだろう。

「足尾・栃木農の勝てない 17 年間は私の財産だった」という 2 度の甲子園を勝ち取った斎藤監督の言葉の重みこそ、あらゆる勝利の避けては通れない鉄則ではないのか。勝利栄光には必ず貴重な敗戦や挫折がつきまとう。それをよく知る指導者は選手を厳しく、そしてあたたかく見守るものだ。勝利や栄光が自分のものだけでないのはもちろんだが、逆に言えば、敗戦も自分だけのものではない。チームスポーツとしての野球のすばらしさは、この全体性にある。自分が良くても負ける。自分がダメだったときでも、勝つ場合がある。

しかし、勝負師阪神監督野村克也氏は言う。

「勝ちに不思議な勝ちあり、負けに不思議な負けナシ」

勝利が、思わぬ時に飛び込んでくることがある。それは野球には相手があるからである。しかし、敗戦には必ず自らたださねばならない弱点が見えるものだ。それを追求する姿勢に優れる者が、よき選手、よき指導者なのであろう。

足利工の厳しい野球の伝統には、こういうすばらしさが秘められていた。

## 作新学院 春夏全国制覇の偉業

昭和 33 年、第 40 回大会栃木大会に作新学院が優勝した。

40 回の記念大会で、沖縄を除く各都道府県それぞれ 1 校の代表をとということが決まり、作新学院が初の甲子園を決めたのである。

監督の山本理おさむ氏は、毎日二千本のノックを打って守備を鍛えた。二千本のノックと言ってもピンと来ないかも知れない。バッテリーを除くと 7 人の野手に、一人平均 300 本近くの守備練習を課したのである。

野球では千本ノック、二千本ノックという言い方をする。しかしそのうちの 2 割～4 割ぐらいしか選手はとれない。つまり、300 本のノックを打つ監督は 60～100 回程度の守備練習をさせるのである。1 回の守備練習に何本のムダ球を打つかで守備の質は決まる。そしてその一打一打が貴重な選手と監督とのコミュニケーションなのである。名監督は、だから、選手のどんな動きでもその意味を把握しているものだ。

作新学院の、そしてあらゆる強豪チームの基盤はここにある。

昭和 33 年、第 40 回栃木大会決勝は、宇都宮工一作新学院。宇都宮工大井投手は 2 年生ながら左腕の好投手であった。しかし、作新学院は 2 年生に負けるわけにはいかない、と意地を見せ大島投手の好投もあって 6-2 と快勝し、念願の甲子園初出場を果たした。

甲子園で作新学院は、大分・上野丘うえのがおかを 3-2 と破り初勝利を挙げると、3 回戦では選抜優勝の熊本・済済せいせいこう鬘

を2-1と撃破した。準々決勝では野球王国、四国の高松商を延長11回2-1と無欲の勝利を飾った。いずれも1点差で破り、魔神が乗り移ったかのごとくであった。

準決勝は板東投手のいる徳島商。板東は魚津・村 椿投手との球史に残る延長18回引き分け再試合を投げ抜いて勝ち上がってきた

この日、宇都宮市内からは人通りが途絶えたほどの熱狂ぶりだったという。ラジオ・テレビの視聴率は記録されてはいないが、おそらく驚異的な数字であったろう。

試合は8回まで作新・大島が板東と譲らぬ投手戦を演じていた。9回、作新学院の守備の乱れもあり3点を奪われ1-4で試合は終わった。しかし、戦ったナインの顔はすべて晴れ晴れしていた。

その後、作新学院チームはこの秋の国体に出場した。

県大会の新人戦と日程が重なり、富山と宇都宮を掛け持ちでの大会だった。札幌商を6-0、海南を4-1、地元魚津を4-1と下して決勝に進出。決勝でも高松商を延長10回1-0で下し、国体で全国制覇を成し遂げたのであった。しかも、夜行で帰って翌日から、県大会の準決勝、宇都宮工を1-0、決勝で矢板を4-0と破り、わずか10日間に二つの優勝旗を手にしたのであった。

さらに驚くべきことは、桐生で行われた第11回の秋季関東大会に出場した作新学院は木更津一を9-1、土浦三を10-4、決勝で石和を3-2と下し、関東大会でも初優勝をとげたのだ。

第40回選手権栃木大会優勝、甲子園大会ベスト4、第13回国体優勝。第11回秋季県大会優勝、第11回秋季関東大会優勝。まさに破竹の勢いであった。

ライバル宇都宮工が甲子園で決勝まで進出した前年のことである。

足利工、宇都宮学園と甲子園出場校が増え、ライバル宇都宮工が全国大会準優勝という快挙で、栃木の高校野球は頂点を極めたかに見えた。

しかし、昭和37年、選抜大会に出場した作新学院は八木沢一田中のバッテリーと中野主将らの強力打線で、選抜大会全国優勝を果たしてしまった。

選抜大会初出場は、前年の昭和36年3月6日午後2時過ぎ、電話での朗報であった。一昨年1年間の不祥事による出場停止を乗り越えての吉報だった。2回戦まで進出したが高松商に0-2と敗れた。

翌、昭和37年連続選抜出場を果たした。2回戦久賀に5-2、準々決勝八幡商とは延長18回再試合の熱戦、再試合では連投の八木沢投手の頑張りなどで2-0と勝った。準決勝の松山商戦では延長からリリーフした加藤投手の好投で、延長16回3-2で勝った。ベンチの八木沢は「勝ったんですね、明日、決勝ですね」とボツリと呟いた。

決勝はその八木沢投手の好投で、日大三を1-0で破り、歓喜の優勝。だれもが目に涙を浮かべた瞬間だった。そして、栃木県民にとっては驚くべき朗報がもたらされた瞬間だった。

その夏、第44回選手権栃木大会が始まった。

それまでは選抜、選手権を連覇するなど夢のように思われていた。挑んだチームもあったがことごとく敗退し、春夏連覇は不可能だというジンクスさえ出来ていた。しかし、夏も栃木県大会を勝ち抜いた作新学院は、北関東大会でも決勝まで進み、鹿沼農商を10-1と大差で破り、連覇の第一関門をクリアした。春の優勝投手・八木沢に加え、加藤投手が成長、作新学院にスキは見あたらなかった。

こうして、昭和37年8月10日、運命の第44回全国高校野球選手権大会が幕を開けた。

ところが、開会式の入場行進を終えた後、主戦八木沢が赤痢で病院に隔離されるといふ、信じられないアクシデントが起こった。八木沢が投げられない。チームはかろうじて試合出場が認められたが、連覇にこれ以上の試練はなかった。

しかしこれで、加藤投手が奮起した。

気仙沼戦はナイターにもつれ込んだが延長11回2-1、慶応を7-0、県岐阜商を9-2と下して準決勝に進出した。

この岐阜商の試合から八木沢選手が退院してベンチ入りできた。また、春の選抜で9連続出塁の大会記録を作った中野主将が、5打数5安打の大活躍だった。

準決勝は優勝候補中京と対戦。7回まで0-0の投手戦、8回、大橋・中野の適時打で2-0、加藤も3安打に完封した。

決勝は久留米商が相手だった。先発加藤も連投の疲れで得意のシュートにキレがない。久留米商は三盗など、作新学院の守備を攪乱させるため、再三捨て身の奇襲を試みる。だが、捕手・田中の冷静な判断がそれをことごとく封じた。加藤投手の力投でまたも0-0の緊迫したゲーム展開。勝負を決めたのは7回裏だった。二死満塁から主将・中野が三遊間を破り、三走・鈴木選手がホームを踏み、作新学院に待望の得点が記録された。

9回も二盗をねらった走者を強肩田中捕手が刺し、1-0で前人未到の大記録が達成されたのだ。  
この1-0という数字の中には、高校野球史上初の偉業が凝縮されているとともに、その陰には二人の優勝投手の<sup>すうま</sup>数奇な運命も刻まれている。

赤痢によって夏の登板を断念した八木沢投手。そして、加藤投手は昭和40年冬、プロでの活躍を期待されながら不慮の交通事故で亡くなった。

栃木県高校野球はこうして、思いがけぬほど早く全国制覇を<sup>と</sup>遂げたのである。

また、作新学院の優勝パレードには、当時の宇都宮市の人口をはるかに超えた、30万人の人数があったという。

作新学院の全成績を見ると、全国・関東のほとんどの大会を制覇している。まさに栃木県を代表する名実ともにふさわしいチームである。

第45回選抜大会では全国注目の江川卓投手を擁して北陽を2-0小倉南を8-0今治西を3-0と破り、広島商と対戦、捨て身の広島商野球に惜しくも1-2で敗退したが、史上最強のチームと呼ばれるほどの活躍だった。

その前の第43回選抜大会にも出場し、さらに第49回、第51回選抜大会にも出場している。この選抜出場6回は本県の最多出場記録である。

選手権大会でも北関東大会で奇跡の逆転劇を演じた昭和39年の第46回大会、江川を擁した昭和58年の第55回大会、9回二死から藤田の逆転2ランで栃木大会を制した昭和53年の第60回大会と5度の選手権大会出場がある。

作新学院の強さは選手が集まるからだ、という声がかつてはあったが、「練習はウソをつかない」（大塚監督）という言葉に象徴される訓練と、しっかりした指導理論と経験に裏付けられたチーム育成能力の高さが、この輝かしい伝統を生み出してきたのだろう。

栃木県というより関東、そして日本の高校野球をリードしてきたのが作新学院である。

## 鹿沼農商 甲子園へ

栃木県で野球の盛んな市町村は多い。鹿沼市もまたそのひとつで、熱狂的ファンの多いことで知られている。

鹿沼農商はその鹿沼市にあって、地元の熱い期待に応えるべく練習を重ねた。鹿沼農商の猛練習は有名だった。練習後部室まで帰るのに、歩く体力すらなく這って帰った、と伝えられている。

鹿沼農商は昭和37年、第44回選手権栃木大会で県代表となった。北関東大会でも桐生を下し決勝に進出した。相手は春夏連覇をねらう作新学院。10-1の大差で夢は破れた。

2年後の昭和39年。2度目の県代表を勝ち取った鹿沼農商は北関東大会に進出した。しかし桐生に1-2とサヨナラ負け、再び夢は遠のいた。優勝はまたも作新学院。

そして昭和40年、阿久津監督率いる鹿沼農商はノーシードで予選に臨んだ。

「私が監督を引き受けてから力が一番ないチームだった。しかし、練習が一番やったチームだった。」（阿久津監督）

練習はウソをつかない。鹿沼農商は初戦、第2シードの宇都宮工を逆転で3-2と破り波に乗ると、足利を6-1、烏山を7-0、代表決定戦では宇都宮学園を2-0と下し、三たび北関東大会に進出した。

北関東大会で鹿沼農商はエース斎藤投手の力投と鈴木主将の殊勲打などで、前橋工を4-0、決勝では農大二を4-1と破り、初めての、念願の甲子園出場を決めたのだ。

鹿沼市民はこの快挙に大喜び、市役所広場での激励会は市民の大歓声に包まれたという。

甲子園大会では東海一と対戦、2-4と逆転負けを喫し、全国大会の勝利は手にすることができなかった。速攻得意な鹿沼農商が2回に2点先取したが、斎藤投手が制球に苦しみ、守りきることができなかった。

2年後の昭和42年、第49回大会で鹿沼農商は2度目の甲子園出場を果たした。五月女投手を擁して県の代表権を得ると、北関東大会では前橋商を4-0、決勝でも農大二を1-0と、五月女投手が2試合連続完封の気迫の投球で勝ち抜いた。

全国大会では今治南に0-3と敗退し、甲子園で勝つことの難しさを味わった。

鹿沼農商はその後鹿沼商工・鹿沼農と分離した。鹿沼農商の伝統は鹿沼商工に受け継がれ、昭和49年春の関東大会で鹿沼商工は初優勝を飾り、秋2連覇の小山とともに本県関東大会3連覇に貢献した。その夏、北関東大会に進んだ鹿沼商工だが、前橋工に10-0の大差で敗れ、伝統復活はならなかった。

平成4年、鹿沼商工は烏山と死闘を演じ、本県初の延長18回引き分け再試合のドラマを演じた。鹿沼商工は再試合でも勝ち、甲子園をめざしたが上位進出はならなかった。

鹿沼農商は校名変更により消えたが、鹿沼農商の与えた感動は人々の胸にいつまでも輝き続けている。

## 小山 悲願の甲子園

昭和43年第50回記念大会。小山、小林監督の野球が頂点を極め、悲願の甲子園初出場を遂げた。春の県大会を制し、春季関東大会でも準優勝の小山は、好投手鈴木を擁して県大会決勝まで進出した。

昭和43年、春季大会に初優勝したあと小林監督はひとり悩んでいた。選手達にあせりと不安が覆いかぶさり、悲願の甲子園というプレッシャーに押しつぶされそうな気配を感じとったためだ。未知の実現には常につきまとう、そこを越えなければ解消されない重圧がある。何度決勝まで進んでも最後の勝利を掴まなければ得られない自信。

それが小山の悩みだった。

小林監督は常光寺の宇井住職の門を叩いた。宇井住職の教えは「克己、平常心是道」であった。

普段通りやればいい。この教えが監督を、選手達を、勇気づけた。作新学院が黒羽・雲願寺の門を叩き、輝かしい栄光を手にした話も有名だが、勝利を目指す者にとって心のコンディショニングがいかに重要かを物語るエピソードだ。

昭和43年、第50回記念栃木大会決勝は小山－作新学院の間で争われた。試合は初回、作新学院の名ショート江俣のエラーから始まった。小山の気迫の攻撃でこのチャンスに一举4点を奪い、鈴木投手の力量から見ても勝利は大きく小山に傾いた。昭和48年までは木製バットの時代でもあり、投手力絶対の時代だった。結局、その後は両チーム1点ずつ奪い合う互角の展開だったが、5-1で小山が初めての甲子園を決めた。

歓喜する小山ナイン、うなだれる作新ナイン。いつの決勝でも同じような光景が見る者の胸を打つ。しかし、学校・OB・市民一体となって強化した小山、そして何より指導者陣の強固な意志と、選手たちの努力があったため、この感動の場面が生まれた。

全国大会では初出場の緊張にも関わらず、高松商と互角の勝負の末1-2とサヨナラで敗れた。しかし、この時から小山は関東の強豪として本県高校野球をリードしていくのである。

3年後の昭和46年、小山は県の代表校となり北関東大会にのぞんだ。しかし高崎商と1-1の接戦の末、9回二死から1塁ベースに当たる不運な決勝打で敗れ去った。

翌昭和47年、代表決定戦で9回まで小山は無安打に封じられていた。相手は江川投手を擁する作新学院。この大会江川投手はまだ安打を1本も打たれていない。シードで2回戦から登板した江川はノーヒットノーラン、完全試合、ノーヒットノーランの快投で代表決定戦に臨んだ。しかし小山・荒川投手も作新打線を5安打無失点に封じ、延長10回に突入。延長10回鈴木が初安打を江川から放ち、11回金久保・中川の連打のあと田村が決勝サヨナラスクイズを決め、北関東大会に進出した。

北関東大会では高崎商を破り、足利工との同県決勝。またも延長11回、足利工石田が三塁線を破ると1塁から阿部が一挙生還。無情な逆転サヨナラ負けであった。

昭和49年秋季関東大会、翌昭和50年の秋季関東大会と関東大会に2連覇した小山は、2年連続で選抜大会に出た。第47回選抜大会に出場した小山は天理に4-6で敗れ、全国大会での勝利をつかめなかった。

翌昭和51年の第48回選抜大会に出場した小山は初見投手の力投と黒田を中心とした強力打線で岡山東商を3-2、土佐を4-3、準決勝では東洋大姫路を1-0といずれも1点差で連破し、選抜大会の決勝に駒を進めた。決勝の相手は崇徳。崇徳のチーム力はけた外れで0-5と完敗。しかし栃木県久々の全国大会での上位進出で、県民は小山の活躍に驚喜した。あるいはその快進撃に驚きさえ覚えた。

しかし、2年連続の秋季関東大会優勝で実証されたように、灼熱の太陽の下、夏場の激しい練習に裏打ちされた実力と指導者の冷静な深い読みがこの快挙を支えていた。

迎えた昭和51年の第58回大会。小山は春季関東大会では準々決勝で川口工に0-8と苦杯をなめていたが、県大会では足利を6-0、烏山を11-1、栃木を12-2と圧倒的な試合を展開。準決勝黒磯には9-6と苦しんだが決勝進出。決勝では足利学園を黒田が完封、4-0と3度目の甲子園に勝ち進んだ。甲子園でも京都商を2-0、原・津末の東海大相模打線を1-0と破り、快進撃。だが赤嶺投手を擁する沖縄・豊見城に1-2と敗れ、惜しくも上位進出はならなかった。

こうして、「克己、平常心是道」の小山野球の活躍は多くのファンを生んだ。

平成6年第76回選手権栃木大会で小山は18年ぶりに甲子園に駒を進めた。伝統の強力打線と堅守で久々の優勝。甲子園では勝利は挙げられなかったが、小山の活躍に古豪復活の希望を託した多くの人々は久しぶりの興奮を味わった。

小山の「平常心」野球はこれからも形を変え、再び栄冠を求めて理想的なチーム作りが続けられていくだろう。多くのファンに支えられながら。

## 怪物江川卓 全国的ブーム

一人の高校生の顔が全国誌の表紙を独占する。その顔はややタマゴ型で、大きな二つの耳たぶと頬骨の高さが特徴だった。ニキビ面の高校球児、江川卓は20年に一度の、いや100年に一度の選手だと騒がれた。

彼のデビューは昭和46年、第53回大会の準々決勝であった。1年生で夏の準々決勝に初の先発を任された作新学院江川卓投手は、烏山を相手に史上初の完全試合の偉業を成し遂げたのである。

完全試合とはパーフェクトゲームと言う。一人も走者を出さず、1試合を27人の打者で終えることだ。これができることは、あらゆる投手の究極の理想と言っている。栃木県では過去3度記録されている。そのうち2度は江川投手である。（もう一人は大田原松尾投手）

左足を顔まで上げ、次に右膝に泥が付くまで投げ下ろすダイナミックな投法で、打者にはほとんどバットに当てさせない。この試合唯一のピンチは、烏山・安藤のセーフティーバントが間一髪でアウトになった場面だけだ。懸命にアピールする烏山ベンチ、未だかつて見たことのない瞬間を期待して判定を見守る役員と観客。しかし、判定は覆らなかつた。終盤を迎え、場内が寒気を感じるような緊張の中、1年生投手江川卓は、完璧に9回まで投げきったのである。最後の打者が高めの速球を空振りした瞬間、いいようのないどよめきが球場全体を包んだ。

江川卓は、こうして伝説となった。

翌、昭和47年第54回大会では、江川はさらに凄さを増していた。大田原9-0（ノーヒットノーラン）、石橋3-0（完全試合）、栃木工1-0（ノーヒットノーラン）という快投で、代表決定戦に進んだ。代表決定戦の相手は宿敵小山、9回まで江川はノーヒットの投球、普通ならば予選試合の全インニングス無安打という奇跡の記録で、彼は県予選を終えるはずだった。しかし、小山・荒川投手も力投、ついに0-0のまま延長に入った。この試合、小山ベンチは勝負の鉄則を信じた。それは「負けなければ敗れることはない」である。つまり、江川から得点を奪えなくとも、得点を与えなければ敗れないのである。延長で江川は遂に打たれた。11回裏、金久保・中川の連打とバントで小山は一死2・3塁。ここで田村がスクイズを決めると、江川は尻もちをついてしまった。

江川の投球がどういうものだったか。球速を計る機械のなかったころだから間接的な証言に頼るしかない。彼のストレートは渦を巻くような感じだったという。速球投手のストレートは縦にキレイに回転してくる。その回転が江川の場合強烈なスピンのため全く赤い縫い目は見えなくなった。木製バットの時代、バットに当てたときの衝撃を、壁を叩いているようだという声もある。小山は江川対策として9人全員左打者にして、全てバントで崩す作戦を考えたとされる。

また、2種類のカーブをなげた。一つはいわゆるドロップと言われた縦のカーブ、そして現在のスライダーのように鋭く横に曲がるカーブである。頭にぶつかる投球が瞬時にど真ん中に落ちてくる。右打者の体にぶつかる快速球があつという間にど真ん中に切れてくる。

彼と対戦したある打者は証言する。頭部への投球が彼のヘルメットを直撃した。昭和47年5月の練習試合でのことだ。1塁まで歩き左手の甲を見ると、ボールの縫い目の跡がそのままわかる形で血がにじんでいた。彼はそれを見てぞっとしたという。

江川の弱点は制球力だった。したがって、次第にストライクを取りに来る投球が多くなる。彼はそれを克服するため、だんだんに投球フォームを小さくしていった。しかし、高校2年までの江川はそれを気にすることなく伸び伸びと投げていた。高校2年が彼の全盛期だったという証言の根拠はここにある。

しかし、怪物はとうとう全国優勝を果たせなかった。高校生という時代にチーム内に彼のような存在がいては、チームバランスを保つことは難しい。作新学院首脳陣の苦悩はここにあった。あまりにも時代を超えすぎた高校球児、それが江川卓であった。だが、それは彼自身の責任ではない。

江川卓投手の主な記録を次にまとめておく。

全国大会

第45回(昭和48年)選抜

回戦	対戦校	スコア	被安打	奪三振	投球回
1回戦	北陽	2-0	4	19	9
2回戦	小倉南	8-0	1	10	7
準々決勝	今治西	3-0	1	20	9
準決勝	広島商	1-2	2	11	9

毎回奪三振  
選抜最多奪三振記録=60

第55回(昭和48年)選手権

回戦	対戦校	スコア	被安打	奪三振	投球回
1回戦	柳川商	2-1	7	23	15
2回戦	銚子商	0-1	11	9	12

沖縄特別国体(昭和48年)

回戦	対戦校	スコア	被安打	奪三振	投球回
1回戦	岩国	0-1	4	7	8

第28回(昭和48年)国体

回戦	対戦校	スコア	被安打	奪三振	投球回
1回戦	広島商	1-0			9
準決勝	静岡	5-0	6	11	9
決勝	銚子商	2-3	8	7	2

県大会

春季県大会

記録名	記録	大会・年	対戦校・備考
大会通算奪三振	36個	第25回(昭47)	4試合28回
ノーヒットノーラン	1試合	第25回(昭47)	対黒羽4-0
1試合最多奪三振	17個	第25回(昭47)	対黒羽(全員)

選手権栃木大会

記録名	記録	大会・年	対戦校・備考
連続無失点記録	44回	第55回(昭48)	5試合
連続無安打記録	36回	第54回(昭47)	対大田原~対小山9回
大会通算最多奪三振	75個	第55回(昭48)	5試合44回
大会通算奪三振	61個	第54回(昭47)	4試合37回2/3
完全試合	2試合	第53回(昭46) 第54回(昭47)	対烏山4-0 対石橋3-0



ノーヒットノーラン	5 試合	第54回 (昭47) " 第55回 (昭48) " "	対大田原9-0 対栃工1-0 対真岡工4-0 四球 1 対氏家2-0 振り逃げ 1 対宇都宮東2-0 (決勝)
1 試合最多奪三振	2 1 個	第55回 (昭48)	対真岡工4-0 9回

\*第54回大会 36 イニングスで被安打 4、第55回大会 45 イニングスで被安打 2

#### 秋季県大会

記 録 名	記録	大会・年	対戦校・備考
連続無失点記録	3 2 回	第25回 (昭47)	4 試合
大会通算奪三振	4 8 個	第25回 (昭47)	4 試合
ノーヒットノーラン	1 試合	第24回 (昭46)	対足利工2-0
連続奪三振記録	7 個	第25回 (昭47)	対那須

\*連続無失点イニングス 139 回 (第25回秋季大会 1 回戦対那須から第45回選抜対広島商まで)

## 足利学園 初出場で1勝

春季県大会で準優勝 5 回。選手権栃木大会では準優勝 3 回、秋季県大会では準優勝 1 回。そして、優勝は 2 度の甲子園を実現させた 2 回。

足利学園 (現白鷗大足利) は決勝戦進出 11 回のうち実に 9 回も決勝で敗れている。

決勝戦での敗戦ほど選手・指導者に重いものはない。その意味で足利学園は最もつらい思いを多く経験したチームの一つである。

しかし、昭和 50 年、本県が独立県となった最初の決勝戦を足利学園はみごと勝利した。

創部以来 14 年、足利学園の努力がやっと報われた。この年から 1 県 1 代表となった栃木県大会の初代王者を決める決勝は足利学園 - 作新学院の間で争われた。試合は初回、作新学院が柏倉の適時打で先制、エース石崎も好投手である。足利学園ベンチには重苦しい空気が流れた。しかし、藤倉がその後の追加点を阻む。3 回、一死 2 塁から猿子が右前打、これを右翼手が後逸し 1 点入ってさらに一死 3 塁。ここで村岡がスリーバントスクイズを決め、2-1 と逆転に成功した。この 1 点が決勝点となり足利学園は初の甲子園出場を決めたのである。サインを出したベンチの度胸とそれに応えた選手の力量が見事な決勝点を生んだのだ。

樋口監督はチームワークの勝利を強調した。

スリーバントスクイズとはまさしく最高のチームプレーである。

全国大会では、足利学園の主戦・藤倉が鹿児島商を完封し、打っても 6 回に決勝点となる右前適時打を放って初出場で初勝利を挙げた。

3 回戦は優勝した習志野と対戦し、藤倉投手が好投したものの、習志野・小川投手に要所をしめられ 0-2 と敗れた。

第 61 回選手権大会 (昭和 54 年) にも足利学園は 2 度目の優勝をとげた。

栃木大会の決勝はまたも作新学院との対戦。足利学園が 2 回に三連打で 2 点を先制。川嶋投手も好投し優位に試合を進めた。しかし作新学院は 6 回 1 点を返し、9 回裏、同点とし延長戦。延長 11 回足利学園が 1 点勝ち越すとその裏作新学院も追いつき、13 回再度足利学園が決勝の 1 点をもぎ取り、半田投手が一死 1

・2 塁のピンチを凌いでの勝利だった。

甲子園で足利学園は都<sup>みやこのじょう</sup> 城に敗れ、2 勝目をあげることは出来なかった。

足利学園は白鷗大足利と校名変更し、平成 10 年第 80 回選手権記念栃木大会では決勝まで進出し、久々の準優勝。

白鷗大足利は、新しい伝統に向けて今もチャレンジを続けている。

# 宇都宮学園 7度の甲子園

宇都宮市内のライバル校といえば作新学院と宇都宮学園である。作新学院に名将山本理<sup>おさむ</sup>氏がいれば、宇都宮学園には知将上野武志監督がいる。夏の選手権出場回数で比較しても、宇都宮学園は7度と作新学院の5度を上回り、本県最多出場を誇る。(選抜は作新学院6度、宇都宮学園2度)。

その宇都宮学園が甲子園に初出場したのは、昭和36年、第43回大会だった。

北関東代表が作新学院と宇都宮学園。その前年、昭和35年にも宇都宮学園は北関東大会に駒を進め、桐生工に0-2と敗れている。2年連続でのぞんだ北関東大会で宇都宮学園は前橋を12-4の大差で下し、作新学院と甲子園<sup>か</sup>を賭けて激突した。試合は8回まで作新学院が1-0とリード。しかし9回宇都宮学園は五月女が同点打を打ち延長となる。延長10回勝ち越し点を奪い宇都宮学園は40年目にして初の甲子園を勝ち取ったのである。

スタンドで静かにこの瞬間を見つめていたのが上野秀文<sup>ひでぶみ</sup>校長であった。

「オイの武志を2年前に監督にしたとき、私の生涯にたった一度でもいい、うちのチームを甲子園にやってくれと頼んだ」

それが実現した瞬間だった。

ベンチの上野武志監督はしかし、その喜びよりもライバルに火をつけたことを悔やんだかも知れない。なぜなら2年前に宇都宮工が甲子園で準優勝し、そして今破った作新学院は翌年、春夏連続全国優勝を成し遂げてしまうからである。

ともかく、上野校長と上野監督の宇都宮学園はこうして初の甲子園に駒を進めたのである。しかし甲子園では法政二に敗れ勝利は挙げられなかった。

それから7年間、宇都宮学園に全国切符は届かなかった。昭和41年、第48回大会では久しぶりに北関東大会に進出したが桐生に敗れた。そして、昭和43年の秋季県大会に宇都宮学園は初優勝を飾り、関東大会は敗れたが、復活の兆しが見えてきた。

迎えた昭和44年、第51回大会でもたまたま作新学院とともに北関東大会に進んだ宇都宮学園は、柏崎の好投で前橋工・高崎商と連破して2度目の甲子園出場を決めたのである。だがこの年も甲子園で勝利を得ることは出来なかった。

また7年間長い苦難の日々があった。

昭和52年、宇都宮学園は栃木商を5-3と破り3度目の甲子園に駒を進めた。

上野監督はしかしその日の感激を「最も長く短くありたい日」と呼ぶ。勝利の感激に、その余韻にいつまでも浸っていたい日であり、逆に県大会のメンバーから甲子園のベンチ入りできない選手を選ばなければならない日であるからだ。指導者の仕事は決断であるといっても、この決断ほどつらい仕事はない。

その宇都宮学園は、甲子園で初戦東海大相模<sup>さがみ</sup>と対戦。見形の満塁本塁打など10-0と完勝した。上野監督にとっての苦難の18年を総決算するように打ちまくった。

2回戦も取手二を3-1と破り、3回戦で惜しくも高知に敗れたが、全国に宇都宮学園を強烈に印象づけた。宇都宮学園は青森国体にも出場し、熊本工を1-0で破り今治西<sup>いまぼり</sup>に1-2で惜敗した。

昭和56年4度目の甲子園に出場し、岡山南を4-0、岐阜南を6-2と破り、またも3回戦進出。だが京都商井口投手を攻略できず、延長11回0-1と惜敗した。打撃のチームの負け方を象徴するような敗戦だったが、この敗戦が宇都宮学園を全国に通用する強力チームに育てたのは間違いない。

なぜなら宇都宮学園のチーム作りは栃木県では唯一の、打撃を重視した攻撃型だからである。宇都宮工・作新学院はじめ足利工など、ほとんどの甲子園チームが守備絶対の思想に支えられている中で、宇都宮学園だけはパワー打撃を前面に押し出した、全国に通用する打線作りを明確に意識してチームを鍛えた。「打線は水もの」といわれるが「水もの」をこえたレベルの打線を目指したといってもいい。

7年後、再び三たび宇都宮学園は息を吹き返し、昭和63年には選抜大会でベスト4に入り、夏も連続出場した。高嶋捕手を中心に選抜大会では天理を9-1、北海を6-2、上<sup>うえのみや</sup>宮を8-7と下しての準決勝進出である。全国の強豪を打ち負かしての勝利はまさに壮絶な熱闘であった。準決勝では東邦山田投手に2安打完封されたがいさぎよい戦いぶりであった。

選手権栃木大会でも決勝で足利学園を3-2と破り、甲子園大会でも倉敷商を7-5と下したが、浦和市立に

延長 10 回 1-2 と敗れ、悲願達成には届かなかった。

宇都宮学園は平成 3 年にも春夏連続出場を成し遂げた。2 度目の選抜大会では福岡<sup>おおほり</sup>大大塚を 7-4 と破ったものの、市川に 2-3 と逆転サヨナラで敗れた。攻撃力を生かすために絶対必要な守りのスタミナ不足<sup>るてい</sup>が露呈し、<sup>にが</sup>苦い敗戦だった。

選手権栃木大会でも高根沢捕手を中心に決勝で葛生を 10-0 の大差で下し甲子園に駒を進めた。しかし、「負けられない」という思いからか、いつもの豪快さ、大胆さが消えた戦いぶりであった。「人間死ぬまで勉強だ、とは人間死ぬまで欲を持ってということだ」という上野監督の言葉は、県大会優勝というレベルに<sup>こしつ</sup>固執した選手への暗黙の<sup>あんもく</sup>アピールであったのだろう。限りなく上を見てこそ現状を越えた努力が生まれ、人を引き込むものにじみ出てくる。それが人々に深い感動を与え、高校野球の奥深い魅力の源泉となるのだ。上野監督のいう「欲」とは結果を先に見ての欲とは違う。人間が己を燃焼し尽くすための、エネルギーとしての「欲」であろう。年輩にしてこれだけのみずみずしさ、新鮮な情熱を持つことはまことに素晴らしい限りである。

甲子園大会で結局、宇都宮学園は、天理に 1-4 と初戦敗退した。

平成 7 年には県内最多出場記録となった 7 度目の甲子園に出場した。上野監督が引退を決意したのはこの時だった。選手に「努力」を説くことの難しさを最後の言葉として残している。

<sup>ほうじょく</sup>飽食の時代にあって「努力」しても得ることが少ない、という嘆きである。指導者が選手に努力を説くことをここまで深めた言葉はあまりないだろう。かつての、努力すれば得られた時代から、努力しなくとも得られる時代となり、努力しても得られない時代となった。スポーツ指導者はここにあらためて次の夢を子供たちに与えなければならなくなった。

上野監督の引退はそういう重い課題を後継の指導者に積み残したのである。

宇都宮学園は、いずれも県民に期待を抱かせる、攻撃力と投手力のバランスがとれた強力チームであり、上野監督の狙いが作新学院以来の全国制覇であったことをこれまでのチームづくりが雄弁に物語っている。

## 高校野球の心

平成 9 年、作新学院を山本理監督が退職した。上野武志監督もそれより早くユニフォームを脱いでいる。80 回記念式典後の祝賀会で功労者表彰を受け、談笑するお二人の姿を見ていると、二人ながらの秘めた想いが伝わってくるようで、戦いを終えた武将のいさぎよさが感じられた。

中等学校時代から野球に情熱を燃やした多くの先人たち。

栃木の高校野球を全国に導いた浜野監督。そのライバルだった人々。

二度の選抜準優勝を陰で支えた<sup>くめかわ</sup>糸川元理事長。連盟を支えた歴代会長や理事長たち。

激闘のドラマを演出した審判部の人々。

スタンドで、グラウンドで、応援してくれる多くのファン。

そして、栃木県高校（中等）野球大会に参加したすべての選手たち。

さらには、長年指導にあたられている多くの現場の指導者・大会関係者の姿が、「教育のための高校野球」の情熱として甦ってくる。

そして野球そのものの、高校野球そのもののダイナミックな魅力を演じた人々の輝きが、この栃木県の高校野球史を通して、鮮やかに浮かび上がってくる。

多くの限らない情熱と汗に支えられたドラマが高校野球なのである。人々の強い思いが集まってこそ、人を感動させる何かが生まれる。

## 黒磯 國學院栃木 葛生

昭和 55 年は「栃の葉」国体。県民、特にスポーツ関係者は誰もが忙しい思いでいた。高校野球連盟も国体開催に向けての準備で、その例外ではなかった。

その第 62 回選手権栃木大会で黒磯は初優勝を遂げた。長く大田原・烏山などがリードしてきた県北チームから初の甲子園出場校が誕生したのである。黒磯は針生投手を擁し決勝で小山を 2-0 と下した。福田監督にとって、県北 15 校にとって悲願達成の日が訪れたのである。黒磯の名物監督細谷先生、長く現場で指揮を執られた大田原阿久津監督。そういう先人の苦勞がやっと報われた日でもあった。

黒磯の野球は機動力野球である。

福田監督は作新学院、宇都宮学園といったチームから基本の大切さを学んだ。そして、ヘッドスライディングに象徴される地道な走塁練習に磨きを掛けた。好投手を育て、基本に忠実な守りを鍛え、そして勝負強い打撃を身につけて初の甲子園を手にしたのである。甲子園では、しかし広陵に敗れ全国大会での初勝利は挙げられなかった。だが、「甲子園入りしてからも全国どのチームよりも練習した。」という黒磯野球の姿勢は、一つの成果となって結実した。

黒磯は第 35 回「栃の葉」国体にも出場したが、地元の期待にもかかわらず初戦を飾れなかった。

昭和 54 年、55 年と秋季県大会に國學院栃木が 2 連覇した。しかし、夏の大会を勝ち抜くのは容易ではない。

國學院栃木は 5 年後、昭和 60 年第 67 回選手権栃木大会でようやく甲子園出場を決めた。淀縄監督から実島監督へと指導者も替わり、その間に着実に県を代表する戦力を身につけていった。

その昭和 60 年の決勝戦で、鈴木投手が 1-0 で鹿沼商工を完封し、國學院栃木の「全員野球」が花開いた。

「毎日の黙々と繰り返したダッシュが間違いではなかったことが一番嬉しかった」（実島監督）

ともすれば、技術・戦略重視の今の高校野球の風潮の中であって、基本である脚力の充実を徹底したところから生まれた國學院栃木の甲子園であった。

全国大会では國學院栃木は関東一に 3-4 と敗れた。

昭和 62 年第 59 回選抜大会にも國學院栃木は出場し、福井商を 6-5 と破り念願の初勝利を飾った。

平成 9 年第 69 回選抜大会にも三たび甲子園の土を踏んだ國學院栃木は 2 回戦に進出した。

華麗な守備とシャープな打撃で、洗練されたチーム國學院栃木は、一人一人の選手を大切にしている指導者に支えられて栃木県高校野球史の一つの頂点を占めた。

平成 2 年、葛生が第 72 回大会を制し、甲子園に初出場を決めた。本県での甲子園出場チームとしては、現在も最も新しい出場校である。

葛生字賀神監督、山本部長は守備力を充実させ、「葛生の守りは手本」と言われるチームを作り出した。守備のコツは数多くの練習である。どれほど球を追ったか、そこで守備の質は決まる。この単純で、しかも最も困難な課題を克服した者に、初めて甲子園は門を開く。葛生の甲子園は予選 6 試合で失策わずか 1 から生まれた初栄冠だった。

宮原球場のフェンスにラバーが取り付けられる前、スライディングキャッチを試み膝を強打した葛生の外野手がいた。そのプレー判断はともかく、一人一人の守りに賭ける執念の素晴らしさが葛生の野球を支えている。

しかし甲子園では、9 回裏二死まで山陽を 4-1 とリードし、早川投手も 3 安打に抑えていたところから大逆転負けを喫し、全国大会初勝利は消えていった。

多くの指導者が通らなければならない試練が葛生にも訪れたのであろうか。「勝利という魔物、野球の怖さ」という陳腐な言葉を持ち出したくなるような敗戦であった。

多くの強豪チームを見ても華々しい成果には必ずそこへ至るステップとしての敗戦が存在する。一挙に壁を乗り越えてしまうチームもあるが、それは熟練した指導者や、驚異的な選手の力量がもたらすものだ。

だれにもそういう幸運が訪れるわけではない。

## 宇都宮南 快進撃

昭和 51 年に 3 校の新設校が誕生した。南から、足利南・宇都宮南、そして黒磯南である。

昭和 55 年黒磯南が第 62 回大会で準決勝に進出し、黒磯の初優勝を後押しした。

宇都宮南は秋元栄監督が就任してもなかなか勝てなかった。昭和 57 年までの 6 年間、2 回戦を突破できなかった。

昭和 58 年、第 65 回記念大会で、宇都宮南はいきなり初優勝をとげてしまった。創部 7 年での甲子園出場である。宇都宮南は春季県大会に出場し、烏山を 1-0 と破ったが國學院栃木に 1-2 と敗退した。しかし、第

65 回大会では、石橋を 5-1 氏家を 14-0 烏山を 6-2、そしてシード國學院栃木を 2-1 と連破、準決勝では栃木商を 4-2 と下し初の決勝に進出した。

宇都宮工との決勝は延長となり 10 回裏荒井投手が自ら決勝打を打ち、松本が歓喜のホームを駆け抜けた。まさに無欲の、そしてさわやかな初優勝だった。

甲子園大会でも宇都宮南は初戦高松商を 2-1 と破り、初勝利を挙げた。「甲子園での初戦負けなし」という宇都宮南の伝統が生まれた瞬間だった。3 回戦では優勝候補中京と互角に渡り合い、1-0 と敗れ去ったがその健闘を称賛する声が多かった。

それから 3 年後、第 58 回選抜大会に初出場した宇都宮南は、高村の好投で御坊商工を 4-3、高知を 2-1、広島工を 4-3、新湊<sup>しんみなと</sup>を 8-3 と破り、瞬く間に決勝の舞台に立った。勝利のたびにインタビューに答える栃木弁の秋元監督の人柄と相まって、宇都宮南人気はエスカレートしていった。

決勝は池田が相手だった。宇都宮南に惜まれたのは雨で一日順延され、勢いをそがれたことだ。結局 1-7 と池田には屈したが、輝く選抜大会準優勝を初出場で成し遂げたのである。

糸川部長と秋元監督らの指導陣と、努力を惜しまぬ選手の作り上げたさわやかドラマであった。

その昭和 61 年の夏、第 68 回栃木大会で、選抜準優勝の宇都宮南はまさかの初戦敗退を喫した。2-1 で宇都宮南がリードして迎えた 9 回裏、満塁で対戦相手今市の江崎が放った一打はライトフェンス最前列に飛び込む逆転満塁サヨナラアーチとなって消えたのである。

宇都宮南はこの昭和 61 年に天国と地獄を同時に味ったのである。

平成 4 年宇都宮南は 2 度目の夏の甲子園に出場、平成 8 年には 3 度目の夏の甲子園に出場した。いずれも初戦を勝利で飾った堂々たる戦いであった。

こうして本県を代表するチームとなった宇都宮南を、平成 10 年秋元監督が静かに引退した。退職後も一年間は監督を務めての引退だった。主戦投手の育て方と、頑固な指導方針は多くの有望選手を育てた。

栃木県の高校野球史の幕が、ここにまた一つ降ろされたのである。

## 佐野日大 黄金時代

平成になってからのこの 10 年間の栃木県高校野球は、佐野日大の時代と言ってもいいだろう。この間に佐野日大の甲子園出場は、春夏合わせて 6 回を数える。

さらに佐野日大を見ると、多くの好投手の存在が目につく。麦倉投手、中村投手、谷村投手、そして亙<sup>わた</sup>投手などである。そして好投手の陰には好捕手がいた。責任感ある立派な主将がいた。乙守部長と松本監督がいた。最後に佐野日大という優れた組織があった。

かつての高校野球は個人が優れていれば、それなりの成果が残せた。いわゆるダークホースである。ここ 10 年以上、そういうチームの出現は次第に少なくなっている。学校規模と組織力がなければ上位進出が難しくなっている。好投手が出現しても、連勝というのが難しくなっている。

しかし、やはり勝負に勝つには人である。チームの営みである。時代は変わっても勝負の原点は変わってはいない。佐野日大の強さの秘密は、この組織力と個人の力とのバランスにある。

平成元年、春季県大会に準優勝した佐野日大は、第 41 回春季関東大会でも準決勝に進出した。惜しくも農大二に 4-5 と敗れたが関東レベルのチーム力が身に付いた。

迎えた第 71 回大会で麦倉投手が 39 イニングス無失点の快投を見せ、決勝で足利学園に 1-0 のサヨナラ勝ちをおさめ初優勝を遂げた。甲子園大会でも麦倉は初戦近大福山を 1-0 と完封し、初勝利をあげた。決勝点も麦倉の本塁打という活躍であった。2 回戦で福井商に 2-3 と敗れ、麦倉の無失点記録も 45 イニングスで途絶えたが、立派な戦いぶりだった。

4 年後の平成 5 年、前年秋の関東大会で準決勝進出を果たした佐野日大は第 65 回選抜大会に初出場、平成 4 年春夏秋とも決勝で敗れた悔しさを一気に解消した。選抜初戦は鳴門商と延長 15 回の大熱戦。中村投手の力投と細田の決勝スクイズで 3-2 と選抜でも初勝利をあげた。3 回戦では八幡商に 2-4 と敗退したが、粘りの佐野日大野球が全国に通用することが実証された。

平成5年第75回選手権大会でも決勝で延長10回葛生を2-1とやぶり、2度目の甲子園に駒を進めた。小さな大投手中村は同点の8回、葛生のスクイズを見破り、瞬間的にウエストするという離れ技を演じ、そのセンスの高さ、勝負度胸の良さを見せた。

甲子園では金子主将が選手宣誓の大役を果たし、開幕試合。しかし、京都西に2-7と敗れた。

平成5年は秋の県大会も優勝、秋季関東大会でも準優勝と常勝佐野日大とっていい活躍だった。

平成6年第66回選抜大会に連続出場、春の県大会優勝と県内では4大会連覇を達成。連勝をどこが止めるかがあいさつ代わりに球場で交わされた。

特に春の県大会は中村の故障があったが岡部投手がみごと投げきった。

しかし、運命の日は平成6年7月27日に訪れた。足利が準決勝で5-2と佐野日大を下したのである。それは猛暑の年で、暑い、暑い日だった。佐野日大の県内連勝記録は26試合で止まった。

平成9年、佐野日大は春季県大会で栃木工に0-1で敗れ去った。しかしその夏、第79回大会で背番号5の<sup>わたり</sup>投手が好投、葛生を7-5と下して3度目の甲子園に出場した。甲子園大会でも亘の剛球と<sup>のぶすえ</sup>信末の巧打で宮崎日大を2-1大分商を4-1と勝ち進み、栃木県35年ぶりの選手権大会ベスト8進出となった。35年とは作新学院の優勝以来ということだ。準々決勝では優勝した智弁和歌山に、パワーで押さえつけられ、惜しくも4-6と敗れた。

佐野日大は秋の大阪国体にも出場し、ベスト8に入った。

翌、平成10年、佐野日大は春の地区予選で小山にコールド負けを喫した。しかし不死身のチーム佐野日大はその夏、2年連続で甲子園出場を勝ち取ってしまったのである。

夏の大会を連覇した学校は多い。作新学院は実に4連覇の大記録をつくっていた。だが北関東大会の高い壁があり、連続して選手権大会出場というチームは栃木県には存在しなかった。独立県になって、徐々にその話題が語られるようになり、近年は「栃木大会のジンクス」という言われ方もしていた。その「ジンクス」を春の予選でコールド負けしたチームがあっさり崩してしまったのである。まさにミラクル佐野日大というしかない。

勝利の立役者は、横島・中村の両左腕投手である。

また、一戦ごとに強さを増していった佐野日大チームそのものである。

甲子園では宇和島東にサヨナラ負けして勝利は飾れなかったが、守りのチーム佐野日大が本県高校野球の新しいリーダーであることは間違いない。

佐野日大の野球は派手ではない。しかし勝負どころでの佐野日大の怖さは他のチームの脅威である。今後も2度目の全国制覇に向けてその最短距離にいる佐野日大の健闘が期待される。

## 栃木大会記録

栃木県校等学校野球連盟は、平成4年佐々木英昭理事長のもと、山崎統由副理事長を記録部長として、大会記録などの系統的な整理に着手した。輝かしい本県高校野球の歴史を後世に伝え、報道関係などの対応を適切に行い、あわせて選手たちの活躍を公正に評価したいという思いからだった。

本県に限らず、公式記録は高校野球精神にそぐわないというような意見もあり、個人記録チーム記録などの詳細な整理分類は遅れていた。この大会記録を始めチーム戦績、本塁打記録などは、しかし、いずれ誰かが公式的なものを作成し、その責任の所在を明らかにしなければならないものだろうと考える。

阿部司理事、堀江隆理事の2名がこの大会記録等の整理担当となり、平成5年の理事会でその一部を公にした。幸い本県には「栃木県高校野球60年史」とその続編の「栃木県高校野球70年史」というすぐれた記録がまとめられている。さらには、昭和48年から「県高等学校野球記録集」が発刊され、すでに25年の蓄積がある。

今思うと、この「県高等学校野球記録集」が発刊された年は、江川投手の時代であり、記録ラッシュの時代でもあった。そういう時代に、この貴重な県高校野球の財産を残すべきだと考え、実行された増山理事長、担当の山内理事の<sup>けいがん</sup>慧眼に大いに敬服するものである。

したがって、本県高校野球の記録的なものはほぼ網羅されていたのであり、記録部理事が行ったのはその整理である。また、阿部・堀江両理事はともにこの時代に本県高校野球に選手として参加し、「青春の発掘」という要素もあった。

阿部・堀江理事の大会記録などの整理は次の手順によった。

- 1 春・夏・秋の全加盟校戦績一覧表の作成
- 2 春・夏・秋の大会通算記録の作成
- 3 春・夏・秋の全本塁打の調査
- 4 全国大会での本県チームの成績
- 5 その他

1は豊富な資料があり、佐々木理事長が自ら一覧表を作成し容易に完成した。

2は朝日新聞社の「全国大会記録」をベースにほとんどゼロからの作成であり、満足のいくものができるまでは公表しないことに決めた。したがって初めて公にするまでに2年間を費やし、その後も調査改訂を加えている。阿部・堀江両理事は下野新聞および栃木新聞の縮刷版、マイクロフィルムなどにより資料集めを開始、さらには過去の全データから該当事項を拾い出し、その相互比較を行うという地道な作業が続いた。並行して3本塁打記録も調査し、本塁打記録は夏の大会のみは平成7年に公表した。春・秋の本塁打記録は平成9年に公表した。4の全国大会のチーム成績は十分手が届かず、細部のデータまで完全なものはまだできていない。

さらに平成6年からは山本秀幸理事。桑川守理事により、県内全試合の個人データを集計し、大会ごとの完璧な記録が作成され、通算大会記録とあわせて活用できるようになった。また、各大会の優秀選手選定にもこの記録が活用され、チーム成績も毎年公表している。

このような営みの中、本県高校野球の歴代の記録はほぼ明らかに成りつつある。その成果は毎年の「県高校野球記録集」に掲載され、本県各加盟校はもとより、報道関係者にも配布し便宜をはかっている。

本来、記録とは何だろうか。たとえ一本の本塁打でも、その価値はさまざまである。数字はあくまで記号である。それを安易にもてあそぶことには、一種の危険が常につきまとう。一部のスポーツ紙や週刊誌のスポーツ記事に見られるように、数値の操作によって大いなる誤解が生み出される場合もある。

本連盟記録部で扱う記録は、チームが戦略的に活用するデータではない。また、マスコミ・プレスが商業用に扱うものでもない。つまり一種の権威でなければならない。それを思うと我々の仕事の不十分さ、責任の重さが痛感される。

今後、本連盟の記録はさらに正確で、適正なものにする努力が続けられるであろう。この「栃木高校野球80年史」に初めて記録編として掲載したが、公表するにあたり、読者の叱責、批判、嘲笑を甘んじて受ける覚悟である。さらには、誤記、不十分な調査などに対するご意見、ご訂正をせつにお願いする次第である。

## おわりに

本文中不適切な記述が多くあると思いますが、ひとえに記述者の未熟さの故、ここに深くお詫び申し上げます。また本来、栃木県高校（中等）野球史を語るためにはその他大勢の指導者、多くのチームを語らなければならないのですが、これからの発展の可能性を、今、安易に記すべきではないとの思いが筆者にはあります。その思いから、栃木県高校野球球史はここでひとまず終わりにします。

ご精読まことにありがとうございました。

平成 10年 12月

栃木県高等学校野球連盟理事 堀江 隆